

異見私見

葛谷栄一の



先の全国JA大会での決議は、「食と農を基軸として地域に根ざした協同組合としての総合力発揮」を旨とするとし、①農業者の所得増大・農業生産の拡大、②地域の活性化、③持続可能な経営基盤の確立・強化、を重点課題とする。

このために組合員のアクティブ・メンバーシップの確立が必要であり、協同組合としての役割発揮が欠かせないとしている。JA批判に対抗してJA改革が進められているが、「協同組合としての役割発揮」ができるか、今、協同組合の真価が問われているということがある。

このアクティブ・メンバーシップの確立のために、「組合員のニーズにあった事業、活動、組合員組織活動等」の取組みの展開を求

めている。その取組みの中心とされるのが、組合員のJA事業の「複合利用」とJAくらしの活動への「複数・2段階参加」の促進である。組合員の意思反映と運営参加を大き

こんなことを感じている時に映画「ワーカーズ・被災地に立つ」を見た。日本労働者協同組合（ワーカーズユニオン）連合会・センタ

「誰かが自分らしく生きる場」にしていくと同時に、「地域の魅力を

に、「協同組合内協同」がますます必要となる。組合員が主役とな

る。組合員が主役となつて展開し、これをJAが事業面等から支えていく、という形での協同活動である。集落

協同組合内協同で アクティブ・メンバーシップ を後押し

く促していくことによつてアクティブ・メンバーを増やしていくことを自論んでいる。さらにアクティブ化していくためにより肝心なことは、組合員の自主性を引き出し、組合員主体の活動を広げていくことではないか。

被災地となった岩手県大槌や、宮城県の気仙沼、巨理、登米で展開されたワーカーズコープの仕事の丹念に追いかけた記録映画であり、ある意味では地味な映画でもある。

障害児を預かってくれる場を「お年寄りが安心して暮らせる街」といった、安心して生きていくために次々と現場で発生してくるニーズに対処しながら、「誰かが自分らしく生きる場」にしていくと

「協同組合内協同」である。JAが合併を繰り返していきながら、園まで実現してしま

（農的デザイン研究所代表）